

文句の九に云はく「随他意の語は是これ他身を説くなり。随自意の語は是これ己身を説くなり」  
 文。方便・譬喩等の五品の意こころなり。寂滅道場を以て元始と為す。第一根性の融不融。  
 華嚴・阿含・方等・般若・法華 各おのおの得道有り。種熟脱を論ぜず。迹門。「初後の仏慧円頓  
 の義ひと齊し」等の釈、「此の妙彼の妙、妙の義殊ことなること無し」等の釈は、爾前得道なり。籤  
 の十八紙まさに云はく「当に知るべし、法華は部に約するときは則ち尚華嚴・般若を破し、教  
 に約するときは則ち尚別教の後心を破す」と。

玄の十九第二教相の下に云はく「余教は当機に物を益して、如来施化の意を説かず」文。籤の一  
 に云はく「漸及び不定に寄すと雖も余教を以て種いえどと為さず」文。三の卷化城喩品の意  
 なり。大通を以て元始と為し、余教を以て種と為さず。第二化導の始終不始終。爾前の  
 得道を許さざるなり。種熟脱を論ぜず。迹門。種は大通、熟は中間ちゅうげんこんにち今日の四味、脱は法  
 華なり。

寿量品の意なり、五百塵点は久遠を以て元始と為すなり。世々番々の成道なり。第三  
 師弟おんごんぶ おんごんの遠近不遠近。種熟脱を論ぜず。本門。種は久遠、熟は中間大通と今日の四味、脱  
 は法華なり。玄の十初紙に云はく「若し余経を弘めんには、教相を明かさゞれども義に於  
 て傷むこと無し。若し法華を弘めんには教相を明かさゞれば文義欠くること有り」文。  
 籤の三五紙に云はく「若し法華に依らば凡そ一義を消するに、皆一代を混じて其の始末を窮  
 む」文。玄の一十四に云はく「教相に三なと為す。一には根性の融不融の相、二には化導の  
 始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相なり。教とは聖人下に被らしむるの言  
 なり。相とは同異を分別するなり。一には声聞の聖人、二には縁覚の聖人、三には菩薩  
 の聖人、四には仏果の聖人。前の三人の聖人は分証の聖人、後の一は極果の聖人なり」  
 と。籤の一の本四十に云はく「前の両意は迹門に約し、後の一意は本門に約す」と。

第一根性の融不融の相寂滅道場を以て元始と為すなり。種熟脱を論ぜず

華嚴・阿含・方等 —————  
 般若・法華 ————— おのおの 各得道あり

籤の一の本四十に云はく「初めの根性の中に二と為す。初めには八教を明かして以て  
 昔を弁じ、次には今経を明かして以て妙を顕はす」文。弘の三五に云はく「此の文既に  
 法華の経の意に依れり。而して釈名等大概彼に準ず。相待は是麤なり。義麤に待して妙  
 を論ずるに当たれり。絶待は是妙なり。義麤を開して妙を論ずるに当たれり。此の二を亦  
 廢麤とも開麤とも名づく」文。

華嚴の円 別は麤、円は妙。相待妙。麤妙を判ず。  
 方等の円 前三を麤と為し、後一を妙と為す。相待妙。麤妙を判ず。

般若の円 前二を麁と為し、後一を妙と為す。  
相待妙。麁妙を判ず。

法華の円 相待妙。麁妙を判ず。 — 約教。前三教を麁と為し、後一を妙と為す。  
絶待妙。麁妙を判ず。 約部。前四味を麁と為し、後一を妙と為す。

相待妙 約教。前三教を麁と為す。横に待す。後一を妙と為す。  
約部。前四味を麁と為す。豎に待す。醍醐を妙と為す。

籤の六に云はく、唐本は七、正直捨方便は相待、開方便は絶待の意なり。玄の五に云はく「破三頭一は相待の意なり。即三是一は絶待の意なり」文。籤の一の本<sup>五+</sup>に云はく「又今文の諸義は、凡そ一々の科、皆先づ四教に約して以て麁妙を判ずるときは、則ち前の三を麁と為し、後の一を妙と為す。次に五味に約して以て麁妙を判ずるときは、則ち前の四味を麁と為し、醍醐を妙と為す。全く上下の文意を推求せずして、直ちに一語を指して、便ち法華は華嚴より劣れりと謂へるは幾許の誤りぞや、幾許の誤りぞや」と。

当分は相待妙 煩惱に待して菩提を論じ、生死に待して涅槃を論じ、相待して説く。故に相待と名づく。

跨節は絶対妙 煩惱即菩提なれば麁妙に非ず。生死即涅槃なれば更に相ひ隔てず。法は無相無名更に不可説なり。故に絶待と名づくるなり。

玄の二<sup>三+</sup>に云はく「此の経は唯二妙を論ず。更に非絶非待の文無し」文。籤の二<sup>六紙</sup>に云はく「当分は一代に通じ、今に於ては便ち相待を成ず。跨節は唯今経に在り。仏意は今に<sup>はじ</sup>適めたるに非ざるなり」と。又<sup>六十張</sup>に云はく「若し相待の中には展転して妙を明かせども、前の麁<sup>なお</sup>猶存せり。今絶対を論ずるに、前の諸麁を絶して形<sup>ぎょうたい</sup>待すべき無し」と。記の一の本<sup>四</sup>に云はく「具<sup>つがさ</sup>に玄文に先に相待に約して以て麁を判じ、次に絶待に約して以て妙を弁ずるが如し」文。

華嚴の円	—	心法妙	相待妙	
		衆生法妙	相待妙	
		仏法妙	相待妙	
方等の円	—	心法妙	相待妙	
		衆生法妙	相待妙	
		仏法妙	相待妙	
般若の円	—	心法妙	相待妙	
		衆生法妙	相待妙	
		仏法妙	相待妙	
法華の円	—	心法妙	相待妙	絶待妙
		衆生法妙	相待妙	絶待妙
		仏法妙	相待妙	絶待妙

玄の二<sup>三六紙</sup>に云はく「是の両妙を用ひて、上の三法を妙ならしむ。衆生の法に亦二妙を具す。之を称して妙と為す。仏法・心法に亦二妙を具す。之を称して妙と為す」文。籤の二<sup>六六紙</sup>に云はく「二妙上の三法を妙ならしむとは、三の妙、法華に在りて方めて妙と称するを得ることを明かさんと欲す。故に二妙を<sup>もち</sup>須ひて以て三法を妙ならしむ。故に諸

味の中に円融有りと雖も全く二妙無し」文。

華嚴の円仏慧 方等の円仏慧 般若の円仏慧 法華の円仏慧開會

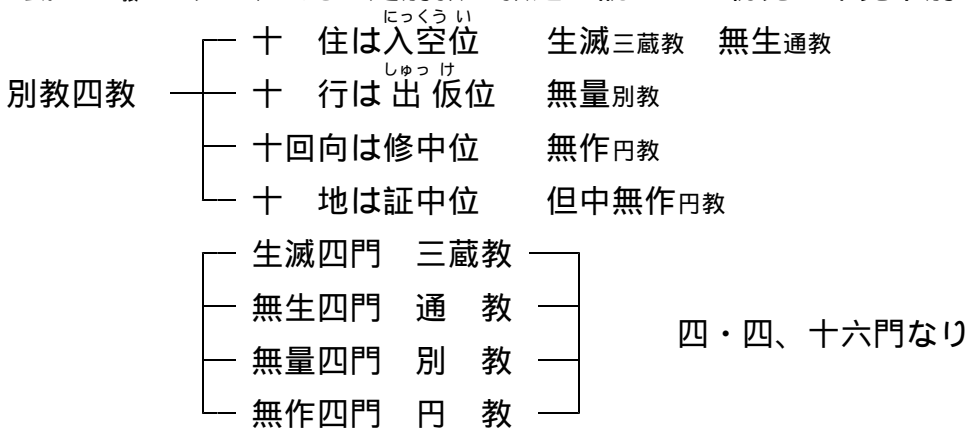
記の一の本四に云はく「円実には異ならず、但し未だ開顯せず、初心の人は円・偏を隔つと謂へり」文。籤の一の本三十一に云はく「故に始終を挙ぐるに意仏慧に在り」文。玄の二三十一に云はく「此の妙彼の妙、妙の義殊なること無し。但し方便を帯し、方便を帯せざるを以て異と為るのみ」文。玄の十四十一に云はく「初後の仏慧円頓の義齊し」文。文句の五紙に云はく「今の如きは始めの如し。始めの如きは今の如し。二無く異無し」文。

籤の一の本四十七に云はく「仏の本意は大に在り。故に本を遂げて初めに居す」文。弘の五の上八十一に云はく「惑者未だ見ず。尚華嚴を指す。唯華嚴円頓の名を知って、而も彼の部の兼帯の説に味し。全く法華絶待の意を失ひ妙教独頭の能を貶挫す。迹本二文を驗して五時の説を檢ふるに円極謬らず。何ぞ須く疑ひを致すべき」文。

爾前の円 一には爾前の円は法華の円と同じ。  
二には爾前の円は別教に撰す。

法華の円 三には爾前の円は法華の相待妙に同じ。  
四には爾前迹門の円は本門の円に対せば別教に撰す。

記の一の本四に云はく「円実には異ならず、但し未だ開顯せず、初心の人は円・偏を隔つと謂へり。須く開顯の諸法実相を聞くべし。若し已に実に入るは但増進を論ず。権人の此に至るをば一向に須く開すべし」文。籤の三六に云はく「若し祇但四教の中の円を判じて、之を名づけて妙と為せば、諸經に皆是くの如き円の義有り。何ぞ妙と称せざらん。故に須く復更に部に約し味に約して方に今經の教円部円を顯はす。是の故に判の中に又分かつて二と為す。先に四教に約して判じ、次に五味に約して判ぜり。若し教に約せずんば則ち教の妙を知らず。若し味に約せずんば則ち部の妙を知らず」文。玄の三五六に云はく「当に知るべし、勝鬘の所説は次第を説いて浅きより深きに至れり。歴別して未だ融せず。乃ち是無量の四諦の中の無作なり。是発心畢竟二不別の無作には非ず」云云。籤の三張に云はく「此は是別教の教道の説にして初発心畢竟不別に非ず」文。



第二化導の始終不始終の相大通を以て元始と為す。三千塵点なり。 種熟脱を論ず中間、靈山の初住

玄の一に云はく「大通を以て種と為し、中間乃至今日の四味を以て熟と為し、今日第五

時の法華を以て脱と為す」文。

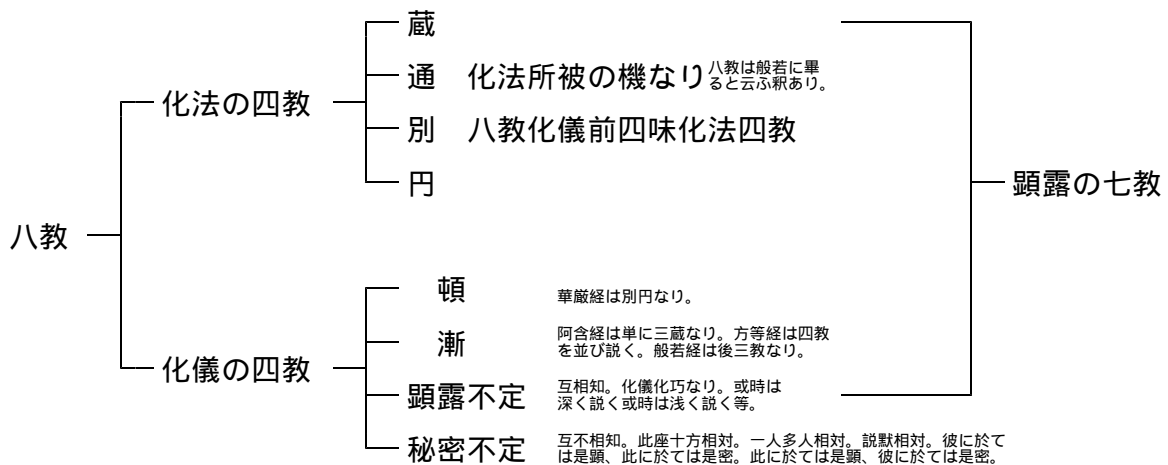
玄の<sup>十九</sup>に云はく「又異をいはゞ余教は当機に物を益して如来施化の意を説かず。此の經は<sup>ほとけ</sup> 仏教を設けたまふ元始、巧みに衆生の為に頓漸不定顯密の種子を作し、中間に頓漸五味を以て調伏し長養して之を成熟し、又頓漸五味を以て之を度脱することを明かす。並びに脱し並びに熟し並びに種すること番々息まず。大勢威猛三世に物を益す。具に信解品の中に説くが如し。余經と異なるなり」と。籤<sup>一</sup>に云はく「次に此經の下は正しく今經の意を明かす。且く迹中の大通を指して首めと為す。漸及び不定に寄すと雖も余經を以て種と為さず。故に巧為と云ふ。結縁已後退大して初めに迷ふ。故に復更に七教の中に於て調停の種を下すを復巧為と云ふ。所以に中間に七教を受くることを得て長養調伏す」と。又云はく「又以の下は今世に復七教を以て調伏し、法華に至って得度せしむることを明かす。故に度脱と云ふなり。並脱等とは多人に約して説く。彼に於ては是種、此に於ては是熟、互ひに説くこと知んぬべし。是の故に並及番々不息と云ふ。此即ち初め及び中間今日等の相を結す。故に更に涌出を引いて迹の文を助顯す。故に大勢威猛等と云ふなり」と。又<sup>十</sup>云はく「次に信解を指すとは、即ち信解の中に又以他日於窓牖中と云ふ。即ち法身地にして機を鑑みること久しきを指す。故に此の一語即ち三世益物の相を兼ね」文。籤の<sup>一</sup>に云はく「垂迹より已來化を受くる者漸く広し。久近の益を得ることは功法華に在り」と。止の三終に云はく「若し初業に常を知ることを作さずんば三蔵の歸戒羯磨悉く成就せず。若し此の釈を作すときは大小両經に於て義相違無し」と。又<sup>八</sup>云はく「遠く根本を尋ぬれば三乗の初業法に愚かならず。若し四念処の聞慧を取って初めと為さば此の初めより真諦の常住を知る」文。弘の<sup>三</sup>に云はく「初文は且く久遠の初業を標す。故に根本と云ふ。十六王子に結縁せざること莫し。且く迹の化を指す。故に遠尋と曰ふ。若取の下は近く此の生に初めて四諦滅理の真常を聞くことを指す」と。又云はく「今日の声聞の禁戒を具する者は良に久遠の初業に常を聞きしに由ってなり。若し昔聞かずんば小尚具せず。況んや復大をや。若し全く未だかつて大乘の常を聞かず、既に小果無し。誰か禁戒の具不具を論ぜんや」と。又<sup>七</sup>云はく「羯磨不成と言ふは、所謂久遠に必ず大無き者は則ち小乗をして法を乗ることを成ぜざらしむ。本無きを以ての故に諸行成ぜず。樹に根無ければ華果を成ぜざるが如し。時機未だ熟せず。權に小の名を立つ。汝等が所行は是菩薩の道なり。始めて記を得て方に大人と名づくるに非ず。故に知んぬ、心宝渚に趣くこと無くんば化城の路一步も成ぜず。豈能く城に入って安穩の想ひを生ぜんや。常住を信ぜずんば声聞の禁戒皆具足せずといふ。斯の言徴有り。此は都て未だ大心を発せざる者は、則ち本無きことを成ぜずと斥ふ。復本無しと雖も受者の心に抛り、仏の本懷の已に大化を施すに抛りて有無の意須く審らかに之を思ふべし」文。又<sup>七</sup>云はく「四念の初業小に違せず、久遠の初業大に違せず」と。籤の<sup>十五</sup>に云はく「迹門には大通を以て元始と為し、本門には本因を

以て元始と為し、今日は初成を以て元始と為す。大通已後本成已来、是くの如き中間に節々の施化、皆漸頓を以て物の機情に適ふ。若しは大若しは小、皆物の機を取らんが為にして而も法を与ふること差別あり」文。玄の十四に云はく「是くの如き等の意皆法身地にして寂にして常に照らす。始めて道樹にして大に逗し小に逗するに非ず。仏智機を照らすこと其の来たるや久し」と。籤の十八紙に云はく「法身地等と言ふは、本地の真因初住より已来、遠く今日乃至未来の大小の衆機を鑑みたまふ。故に本菩薩の道を行ぜし時、成ぜし所の寿命今猶未だ尽きずと云ふ。豈今日迹中に草座木樹にして方めて今日の大小の機を鑑みたまはんや」文。又九紙云はく「一代始成四十余年にして、豈能く彼の世界塵数の菩薩、万億の諸大声聞をして、便ち大道を悟らしめ、現に無生を獲せしめんや。色声の益略して称紀し難し。故に知んぬ、今日の逗会は昔成熟の機に赴く。況んや若しは種若しは脱、言の尽くすべきに非ざるをや」文。玄の一四紙に云はく「夫理は偏円を絶すれども円珠に寄せて而して理を談ず。極は遠近に非ざれども宝所に託して而して極を論ず。極会し円冥して事理俱に寂なり」文。籤の一八紙に云はく「理絶等とは、既に開顕し已はれば偏円の名を絶す。華嚴・方等・般若の偏円、対し明かすに形はさんと為す。往法華の絶待の縁を結び今円珠に寄せて絶理を談ず」文。又云はく「法譬二周の得益の徒は往日結縁の輩に非ざるは莫し」文。

第三師弟の遠近不遠近の相五百塵点久遠を以て元始と為す。種熟脱を論ず番々の成道なり。

籤の一三紙に云はく「近く迹門を以て尚昔と為すことを得。況んや伽耶已前をや」文。玄の二九紙に云はく「迹中の大教既に起これば本地の大教興ることを得ず」文。玄の七三紙に云はく「迹の因に執して本の因と為すは天月を識らずして但池月を觀るが如し」文。玄の一八紙に云はく「又衆經には咸く道樹にして師の実智始めて満じ、道樹を起ちて始めて権智を施すと云へり。今の經には師の権実道樹の前に在りて久々に已に満ぜりと明かす。諸經には二乗の弟子実智に入ることを得ず、亦権智を施すこと能はずと明かす。今の經には弟子実に入ること甚だ久しく、亦先より解して権を行ぜしことを明かす。又衆經には尚道樹の前の師と弟子との近々の権実を論ぜず。況んや復遠々をや。今の經には道樹の前の権実長遠なることを明かす。補処世界を数ふるに知らず。況んや其の塵数をや。經に云はく「昔未だ曾て説かざる所を今皆當に聞くことを得べしと、慇懃に称歎すること良に所以有るなり。當に知るべし、此の經は諸經に異なるなり」と。籤の一六紙に云はく「次に今經の下は今經の一体の権実久々に已に満ずることを明かす。迹の中の三千界の墨点尚已に久と為す。況んや今の本の中の五百億塵界をや。故に久々と云ふ。又一節已に久し。況んや節々相望するをや。故に久々と云ふ」と。又云はく「道樹の前の一節兩節を説かず。故に近々と云ふ。爾前の一節兩節を今に望むるに尚近し。況んや中間の遠が中の近無きをや。故に近々と云ふ。次に今經を況出す。遠々と言ふは只是

久々なり」と。籤の二<sub>三四</sub><sup>+</sup>に云はく「聞法を種と為し発心を芽と無し、賢に在るは熟の如くしょう聖しやうに入るは脱だつの如し」文。弘の二<sub>三九</sub><sup>+</sup>に云はく「運うん像末ざうまつに居して此の真文しんぶんを囑むかしる。宿妙因しゆくめういんを植うゑゑたるに非あざるよりは誠まことに遇あひ難がたしと為す」と。記の七<sub>八</sub><sup>+</sup>に云はく「故に知んぬ、末代まつだいに一時も聞きくことを得えず。聞きいて而して信しんを生なずる事こと須すく宿種しゆくしゆなるべし」と。玄の二<sub>五七</sub><sup>+</sup>に云はく「此の經には仏種ぶつしゆは縁えんに従したがひて起おこる。是の故に一乘いちじやうを説せつく。亦最実事さいじつじと名なづく。豈妙あにめうに非あずや。前の三さんは是これ権けんなり、故そに麤そと為す、後の一いちは是これ実じつなり、故そに妙めうと為す」と。記の九<sub>十</sub><sup>+</sup>に云はく「末代まつだい未みだ曾そうて発心はつしんせざるも亦聞きく、況いはんや発心はつしんをや。問とふ、末代まつだいにはことごと咸いづくく聞きく、仏世ぶつぜには安やすんぞ簡かんばん。答こたふ、仏世ぶつぜは当機たうきの故ゆゑに簡かんぶ。末代まつだいは結縁けつえんの故ゆゑに聞きく」と。記の一<sub>三七</sub><sup>+</sup>に云はく「一時一説一念いちじついちせついちねんの中に三世九世種熟脱しんじゆくじゆじゆだつの三あり」と。籤の一いちに云はく「垂迹すゐじやくより已来化いらいけを受うくる者もの漸ゆるく広ひろし。久近くこんの益えきを得るは功こう法華ぽうげに在り」文。弘の七<sub>三七</sub><sup>+</sup>に云はく「過去かこに種しゆを下くだせるは、現在げんざいに重かさねて聞きいて成熟じゆうじゆくの益えきを得。未みだ曾そうて種しゆを下くださず、現在げんざいに種しゆを成なじて未来みらいに方まに益えきす。故ゆゑに三世さんぜの益えき皆みな法輪ぽうりんに因よる」と。弘の五<sub>三</sub><sup>+</sup>に云はく「借たど使ひ未みだ悟さとらざるも妙因めういんと為なるべし」と。大論だいろん九<sub>十九</sub><sup>+</sup>に云はく「一切いっけつの菩薩ぼさつ乃至初ひつじやう発心はつしん皆みな必かならず。法華經ぽうげきやうの中に説せつくが如ごとし」文。玄の一<sub>八</sub><sup>+</sup>に云はく「隨他意ずいたいういの語ごにして仏の本懐ぶんのほんくわいに非あず、故ゆゑに不務速説ふむそくせつと言いふなり。今經いまきやうは正直しんじきに不融ふじゆうを捨すて但融ただじゆうを説せつき、一座席いざせきをして同一道味どうみならしむ。乃すなはち如来出世にらいしゆつしゆの本懐ほんくわいを暢のぶ。故ゆゑに此の經このきやうを建た立りして、之これを名なづけて妙めうと為なす」と。籤の一<sub>十九</sub><sup>+</sup>に云はく「法華ぽうげより已前いぜんをば皆隨他みなずいたと曰いふ。故ゆゑに前教ぜんきやうの中に並ならびに融じゆう有ありと雖も、兼帶けんたいを以もつての故ゆゑに並ならびに隨他ずいたに屬ぞくす。未みだ開頭かいとうに堪たへず不務速ふむそくと名なづく。務むは事ことの速すみやかなるなり。唯今經ただいまきやうに至いたつて、諸しよの不融ふじゆうを開ひらいて唯獨一ただいつの融じゆうなり。前の諸部ぜんしよぶをして同一どういの妙法めうぽうならしむ。出世しゆつしゆの意い足たりりぬ」文。秀句しゆきうの下<sub>十</sub><sup>+</sup>に云はく「当まさに知しるべし、兼けん但だん對たい帶たいの隨他意ずいたいういの經きやうは未みだ最照さいしやう有あらず」文。玄の六<sub>六</sub><sup>+</sup>に云はく「本もと此この仏ぶつに従したがひて初はつめて道心だうしんを發はつし、亦此またこの仏ぶつに従したがひて不退地ふたいぢに住す」文。記の九<sub>五</sub><sup>+</sup>に云はく「初はつめて此この仏菩薩ぶつぼさつに従したがつて結縁けつえんし、還かえつて此この仏菩薩ぶつぼさつに於おて成就じゆうじゆす」文。



—	華嚴	乳	別円	
—	阿含	酪	三蔵	随自意
—	方等	生	四教	約部大綱
—	般若	熟	後三教	

籤の一本<sup>五+</sup>に云はく「前四味を麤と為し、醍醐を妙と為す」と。

—	蔵	
—	通	随他意
—	別	約教綱目
—	円	

籤の一に云はく「前の三を麤と為し後の一を妙と為す」と。記の一<sup>本五</sup>に云はく「頓等<sup>これ</sup>は是此の宗の判教の大綱、蔵等は是一家<sup>もうもく</sup>釈義の綱目なり」文。

玄の七<sup>四+</sup>に云はく「余経は通じて論ずれば理に約して大妙<sup>こと</sup>殊ならず。而も別しては方便を帯せり。此の経は方便を帯せず。故に別して妙と称す。小乗入ることを得て<sup>ほつ</sup>発迹<sup>しゃくけんぼん</sup>顕本す。故に別して妙と称すと。玄の一<sup>七</sup>に云はく「若し不定<sup>ふじょう</sup>を論ぜば義則ち然らず。高山頓説すと雖も寂場を動ぜずして而も鹿苑<sup>ろくおん</sup>に遊化し、四諦生滅を転ずと雖も而も不生不滅<sup>さまた</sup>を妨げず。菩薩の為に仏の境界を説くと雖も而も二乗の智断有り。五人証果すと雖も八万の諸天無生忍を獲ることを妨げず。当に知るべし、頓に即して而も漸、漸に即して而も頓なり」と。大経に云はく「或時は深を説き或時は浅を説く。開すべきをも即ち<sup>しゃ</sup>遮し、遮すべきをも即ち開す。一時一説一念の中に<sup>つばさ</sup>備に不定有り」と。籤の一<sup>未初</sup>に云はく「初めの文は此は華嚴を指す。動ぜず離せずして而も昇<sup>にしようにゆ</sup>而遊とは、此は頓の後漸の初め頓を動ぜずして而も漸化を施すことを指す」と。又<sup>二紙</sup>云はく「雖<sup>すいてん</sup>轉四諦とは鹿苑を指す。此漸化を施すと雖も頓を起こさざることを指す。此の二味既に然なり」と。又<sup>四紙</sup>云はく「或時は深を説き或時は浅を説く等を不定と名づくとは、彼此互ひに相知るに由るを以ての故なり。若し秘密は即ち下の文の如し。互ひに相知らず。是の故に密と名づく。不定と秘密と並びに<sup>どうちよういもん</sup>皆同聽異聞を出でず」と。又云はく「一時等とは<sup>きよう</sup>広より狭に<sup>い</sup>之く。時は<sup>い</sup>謂はく五味の一、亦<sup>これ</sup>是一部一会なり。説は謂はく一句一言、念は謂はく一刹那<sup>せつな</sup>の頃なり」と。玄の一<sup>六</sup>に云はく「秘密不定は其の義然らず。如来は法に於ても最も自在を得たまへり。若しは智、若しは機、若しは時、若しは処、三密四門<sup>さわ</sup>妨げ無く礙り無し。此の座には頓を説き、十方には漸を説き不定を説く。頓の座には十方を聞かず、十方には頓の座を聞かず。或は十方には頓を説き不定を説き、此の座には漸を説き、各々相知聞せず。此に於ては<sup>これ</sup>是顯、彼に於ては<sup>これ</sup>是密なり。或は一人の為に頓を説き、或は多人の為に漸を説き不定を説く。或は一人の為に漸を説き多人の為に頓を説く。各々相

知らず、互ひに顯密を為す」と。又云はく「今の法華は是顯露にして秘密に非ず。是漸頓にして漸々に非ず。是合にして不合に非ず。是醍醐にして四味に非ず。是定にして不定に非ず。此くの如く分別するに、此の經と衆經の相と異なるなり」と。籤の一<sup>末七</sup>に云はく「初めの文に今法華は是顯露等と云ふは秘密に對非ず。故に顯露と云ふ。顯露が七が中に於て通じて奪つて而も之を言へば並びに七に非ざるなり。別して与へて而も之を言はゞ但前の六に非ず。何となれば七の中に円教有りと雖も、兼帯を以ての故に、是の故に同じからず、此は部に約して説くなり。彼の七が中の円と法華の円と其の体別ならず。故に但六を簡<sup>えら</sup>ぶ。此は教に約して説くなり。次に是漸頓非漸々と言ふは具に前に判ずるが如し。今の法華經は是漸後の頓なり。謂はく漸を開して頓を顯はす、故に漸頓と云ふ。法華の前の漸の中の漸に非ず。何となれば前は生熟二蘇を判じて同じく名づけて漸と為す。此の二經の中に亦円頓あり。今の法華の円と彼の二經の円頓と殊ならず。但彼の方等の中の三、般若の中の二に同じからず、此の二・三を漸の中の漸と名づく。法華は彼に異なるなり、故に非漸々と云ふのみ。人之を見ずして便ち法華を漸頓と為し華嚴を頓々と為すと謂へり、恐らくは未だ可ならず。是合等とは是開權の円なり、故に是合と云ふ。諸部の中の円に同じからず、故に非不合と云ふ。合とは只是會の別名なり」文。籤の一<sup>末五紙</sup>に云はく「今家義を判ずるに味々の中に皆不定有り。故に旧が専ら二經を指すに同じからず」と。記の一<sup>本五十五</sup>に云はく「比竊かに読む者尚天台は唯藏等の四なりと云ふ。一に何ぞ味きや、一に何ぞ昧きや。是の故に須く經を消する方軌を知るべし。頓等は是此の宗の判教の大綱、藏等は是一家釈義の綱目なり。若し諸經を消するには但藏等を用ふれば其の文稍通ず。若し法華を釈するには頓等の八無くんば挙止<sup>おきどころ</sup>措<sup>これ</sup>を失ふ」と。授決集<sup>五</sup>に云はく「四教と言ふは漸の中より出でたれば本大綱に非ず、此綱目なり。須く知るべし、天台は三教を以て大綱と為す。一には非頓非漸、二には頓、三には漸なり。初めをば亦円とも名づく」と。浄名広疏に云はく「円頓漸の三教なり」と。文句三<sup>三十</sup>に云はく「当に知るべし、此の土にも一より無量を出だして、頓に非ずして而も頓、漸に非ずして而も漸。其の事已に竟はれば必ず当に無量の法を収めて還つて一法に入れ、權を開し實を顯はし、化を息め真に歸すること彼の土と同じかるべきなり」と。記の三<sup>十五</sup>に云はく「一より無量を出だすと言ふは、始め華嚴より般若に至る<sup>このかた</sup>來皆一法より開出す。般若に至る時頓漸已に竟はんぬ。而るを人法華は頓漸の外に出でたりと知らず。請ふ、竟の字を觀よ。法華は但是無量を収めて以て一に歸す」と。又云はく「非頓而頓等とは、法華の一乘は頓漸の撰に非ず。一に於て開出すれば乃ち頓漸を生ず。是の故に今非頓而頓と云ふ。非漸而漸此に準じて知んぬべし」と。註釈<sup>中二九</sup>に云はく「法華の前四十余年四時の所説は四教八教なり。結成已に竟はる」と。弘の九<sup>聖</sup>に云はく「初めの華嚴は是頓なり。次に若し鹿苑の下は是漸なり。法華涅槃は頓漸の撰に非ず。但是漸を會して而も頓に歸す」と。守護章<sup>上三</sup>に云はく「其の八教とは



但前の四味に立つ。第五時に<sup>わた</sup>渉らず。法華涅槃は第五時に撰す。何ぞ八教に撰せんや。八教を狭<sup>な</sup>と為し五味を広と為す。法華涅槃を八教に相撰するに両の義門有り。約教の辺は小分相撰し、約部の辺は<sup>すべ</sup>都て相撰せず」と。玄の十<sup>二</sup>紙に云はく「凡そ此の諸經は皆是<sup>これ</sup>他意に逗会して他をして益を得さしむ。仏意は意趣何れにか之くといふを談ぜず。今經は爾らず。是の法門の網目を<sup>か</sup>結けて、大小の觀法、十力無畏、種々の規矩、皆論ぜらる所なり。前の經に已に説くを<sup>もつ</sup>為ての故なり。但如来布教の元始・中間の取与・漸頓<sup>とき</sup>時に適ひ、大事の因縁・究竟の終訖を論ず。設教の綱格・大化の筌蹄なり。」と。止の一に云はく「界内は隨<sup>かいだい</sup>他意なるが故に拙と為し、界外は隨<sup>かいげ</sup>自意なるが故に巧<sup>ぎょう</sup>と為す」と。又云はく「界内は能所有るが故に麤と為し、界外は能所無きが故に細と為す。」文。玄の十<sup>初</sup>に云はく「略して教を明かすに五と為す。一には大意、二には異を出だす、三には難を明かし、四には<sup>こしゆ</sup>去取し、五には教を判ず。」文。

- |    |   |    |                             |
|----|---|----|-----------------------------|
| 大意 | ┌ | 本門 | 本因を以て元始となす                  |
|    |   | 迹門 | 大通を以て元始となす                  |
|    |   | 今日 | 初成を以て元始となす                  |
| 判教 | ┌ | 頓教 | 他宗の義法界性論に破する所               |
|    |   | 漸教 | 初後の <sup>ぶつて</sup> 仏慧円頓の義齊し |
|    |   | 不定 |                             |

三方便とは、文句の三<sup>五</sup>十に云はく「方とは法なり、便とは用なり。法に方円有り、用<sup>ゆう</sup>に差会有り。三権は是矩是方、一実<sup>いた</sup>は是規是円。若し智、矩に詣るときは則ち善く偏の法を用ひて衆生に<sup>とうえ</sup>逗会す。若し智、規に詣るときは則ち善く円の法を用ひて衆生に逗会す」文。方便品を釈するに三の方便有り。文句の三・四に<sup>ほうゆう</sup>釈せり。法用方便<sup>隨他意の方便、体外の方便、他經。</sup>能通方便<sup>のうつづ</sup>隨<sup>ひ</sup>他意<sup>ひ</sup>の方便、<sup>ひ</sup>体外<sup>ひ</sup>の方便、<sup>ひ</sup>他經。秘妙方便<sup>隨自の方便、法華の方便。</sup>亦体内の方便と云ふ。籤の十<sup>五</sup>紙に云はく「諸部の中に権有り実有りと雖も、而も並びに権実本迹、物に被るの意を明かさず、故に大綱に非ず。故に法華を説くには唯大綱を存して網目を事とせず。」と。又<sup>六</sup>紙云はく「始め華嚴より般若に至る<sup>このかた</sup>来<sup>せつきょう</sup>は、皆設教の意を説かずと云ふ。唯法華に至って前教の意を説き、今教の意を顯はす」と。玄の十<sup>三</sup>紙に云はく「当に知るべし、此の經は唯如来設教の大綱を論じて網目を委細にせず」と。止の五<sup>六</sup>十に云はく「一目の<sup>あみ</sup>羅は鳥を得ること能はず。鳥を得ることは羅の一目なるのみ。衆生の心行各々不同なり。或は多人に同一の心行あり。或は一人に多種の心行あり。一人の為にするが如く、衆多にも亦然なり。多人の為にするが如く、一人も亦然なり。須<sup>すべから</sup>く広く法網の目を施して心行の鳥を捕ふべきのみ」と。弘の五<sup>中</sup>八に云はく「一目の下は譬へを挙ぐるなり。多人或は一人の初後に逗せんが為の故に、須く広く説くべし。若し隨って其の入ることを得ば則ち多を須ひず。故に鳥を得る羅の一目と云ふ。一目と言ふは乃ち最後入法の<sup>ことば</sup>言に拠る。一生に之を行ぜば豈唯一目のみならん。是の故に或は一人に多を用ひ、或は多人に一を用ゆ。

況んや一人の始末一をもって弁<sup>わきま</sup>ふべきに非ずや。故に下に合するに衆多の為にするが如く一人も亦<sup>しか</sup>爾りと云ふ。羅とは爾雅に云ふ、鳥の罟<sup>あみ</sup>を羅と曰ひ、兔の罟<sup>あみ</sup>を罟<sup>し</sup>と曰ふ、亦名づけて罟<sup>しや</sup>と曰ふ。衆生の下は合す。捕とは陸の獵りなり逐なり」と。智証の釈に曰く「千目を備へずんば奚<sup>いづく</sup>んぞ一魚を得ん。諸宗を尋ぬるに非ずんば寧ろ真味を知らんや」文。玄の六<sup>八十</sup>に云はく「若し相似の益は生を隔つれども忘れず。名字<sup>みょうじ</sup>觀行の益は生を隔つれば則ち忘る。或は忘れざるもあり。忘れし者は若し知識に値<sup>あ</sup>へば宿善還つて生ず。若し悪友に値<sup>あ</sup>へば則ち本心を失ふ」文。涅槃經二十二に云はく「悪象等に於ては心に恐怖すること無し」文。涅槃經十に云はく「唯一人」文。守護章<sup>中の上九紙</sup>に云はく「都て正義ならず一切の学人」文。此等の文は、爾前今經・実不実・高下・浅深<sup>せんじん</sup>・本迹の大事の証拠なり。玄の十四に云はく「已今当の説最も為れ難信難解なり。前の經は是已説、隨他意なり。彼には此の意を明かさず。故に信じ易く解し易し。無量義は是今説、亦是隨他意なれば亦信じ易く解し易し。涅槃は是当説、先に已に聞くが故に亦信じ易く解し易し。將に此の經を説かんとす、疑請重疊<sup>ぎしやうちようじやう</sup>せり、具に迹本二文の如し。請を受けて説く時、只是教意を説く。教意は是仏意なり、仏意は即ち是仏智なり。仏智至つて深し。是の故に三止四請<sup>さんしししやう</sup>す。此くの如き艱難<sup>かんなん</sup>を余經に比するに、余經は則ち易し」と。籤の十五に云はく「此の法華經は開権顕実し開迹顕本す、斯くの如き両意永く余經に異なるなり。請の倍し疑ひの多きこと復諸經に異なるなり。故に迹門には三止四請し、本門には四請三誠<sup>しやべつしやうさんかい</sup>す」文。爾前法華の対判なり。文句の八<sup>十四</sup>に云はく「今初めに已と言ふは、大品已上漸頓の諸説なり。今とは、同一座席、謂はく無量義經なり。当とは、謂はく涅槃なり。大品等の漸頓は皆方便を帯すれば、信を取ること為れ易し。今無量義は一より無量を生ずれども、無量未だ一に還らず。是亦信じ易し。今法華は法を論ずれば一切の差別融通<sup>しやべつゆうずう</sup>して一法に歸す。人を論ずれば則ち師弟の本迹俱に皆久遠なり。二門悉く昔と反すれば信じ難く解し難し。鋒<sup>ほこさき</sup>に当たる難事は法華に已に説く。涅槃は後に在れば則ち信すべきこと易し」と。記の八<sup>十</sup>に云はく「鋒に当たるとは法華は前に在り、大陣の破り難きが如し。涅槃は後に在り、余党の難からざるが如し。初めに先づ鋒に当たる、斯は為れ易からず」と。玄の十に云はく「已今当の説最も為れ難信難解。前の經は是已説、隨他意なり。彼に此の意を明かさず。故に信じ易く解し易し」「余經に比するに即ち易し」等。秀句<sup>下</sup>に云はく「当に知るべし、已説の四時の經、今説の無量義經、今説の涅槃經は易信易解なり、隨他意の故に。此の法華經は最も為れ難信難解なり、隨自意の故に。隨自意の説は隨他意に勝る。但し無量義の隨他意とは未合の一辺を指す。余部の隨他意に同じからざるなり」と。文句の九<sup>十六</sup>に云はく「邪師の法を信受するを名づけて飲毒<sup>おんどく</sup>と為す」文。弘の九<sup>七</sup>に云はく「法華已前は猶是外道の弟子なり」文。諸論の教道は此の実を見ず。玄の三<sup>十三</sup>に云はく「法華は衆經を總括して、事此に極まる。仏出世の本意、諸の教法の指歸<sup>しき</sup>なり。人此の理を見ず、是因縁の事相なりと謂ひて、輕慢<sup>きやうまん</sup>

して止まらざれば舌口中に爛れんとす」と。籤の三五<sup>+</sup>に云はく「已今当の妙、茲に於て固く迷へり。舌爛れて止まざるは、猶為れ華報なり。謗法の罪苦長劫に流れなん。具に止観第四の逆流の十心の中に説くが如し」と。籤の十<sup>七</sup>に云はく「一代の教法を収め、法華の文心を出だして諸經の所以を弁ず。請ふ眼有らん者は委悉に之を尋ねよ。法華は漸円にして華嚴の頓極に及ばずと云ふこと勿れ。当に知るべし、法華は部に約するときも、則ち尚華嚴・般若を破す。教に約するときは則ち尚別教の後心を破す」と。記の六<sup>六</sup><sub>四</sub><sup>+</sup>に云はく「諸の小王を廢して唯一主を立つ。是の故に法華を王中の王と名づく」と。記の一<sup>本</sup><sub>四</sub>に云はく「本地の總別は諸説に超過し、迹中の三一は功一期に高し」と。輔正<sup>三</sup><sub>三</sub>に云はく「諸説に超過すとは、一は則ち前十四品に超え、二は則ち一代の教門に超ゆ。一々の句並びに諸經に異なるなり。故に已今当の説最も為れ第一と云ふ」と。論記<sup>智</sup><sub>証</sub>に云はく「八教の頂に居す。故に最も其の上に在りと云ふ」と。文句の八<sup>十</sup>に云はく「爾時仏復告より下は、第二に所持の法、及び弘教の方法を歎ず。所持の法は是自軌の法なり。弘教の法は是軌他の法なり。法妙なるが故に人貴く、人貴きが故に処尊く、処尊きが故に因円なり、因円なるが故に果極なり。經に難解難入と云ふ」と。記の六<sup>三</sup><sub>六</sub><sup>+</sup>に云はく「縦ひ經有りて諸經の王と云ふとも已今当説最為第一と云はず。兼但对帶其の義知んぬべし」文。

一に法妙<sup>應</sup> 法妙なる故、爾時仏復告より況滅度後に至る。

二に人貴<sup>賤</sup> 人貴き故、藥王当知より手摩其頭に至る。

三に処尊<sup>卑</sup> 処尊き故、藥王在処より三菩提に至る。

四に因円 因円なる故、藥王多有人より菩薩之道に至る。

五に果満 果満なり、藥王其有衆生より三菩提に至る。

文句の四<sup>十</sup>に云はく「二乗作仏は今の經より生まれり」と。記の四に云はく「円乘の外名づけて外道と為す」と。

立世阿毘曇論に云はく「閻浮提より梵天に至るの量は、譬へば九月十五日、若し一人有り、彼の梵天に在って百丈の石を放って下界に墜ち向かひ、中間に碍ること無ければ、後の歳九月十五日に至りて閻浮提に当たるが如し」文。宝積經に云はく「若し四十里の磐石を以て色究竟天より下すに、一万八千三百八十三年を経て、此の地に至ることを致す」文。文句の十<sup>三</sup>に云はく「福德の人は舌、鼻に至る。三蔵の仏は髮際に至る。今梵天に至るは凡聖の外に出過し、淨天の頂を極む。相既に常に殊なり、説弥信ずべし」文。以て円經の殊勝を顯はず者なり。經に云はく「是諸の如来の第一の説、諸經の中に於て最も其の上に在り」と。藥王品には、今經の一代に勝ることを十喩を挙げて称歎し、天台は六喩を以て釈し、妙樂は十双を以て釈し、伝教は十勝を以て釈す。此の中に即身成仏は今經に限ると見えたり。

- 十喩
- 一に海は川流江河の中の第一なり
  - 二に須弥山は土山・黒山・小大鉄圍・十宝山の中の第一なり
  - 三に月天子は衆星の中の第一なり
  - 四に日天子は三光天子の中の第一なり
  - 五に転輪王は小王の中の第一なり
  - 六に帝釈たいしゃくは三十三天の王なり
  - 七に梵王ぼんのうは一切衆生の父なり
  - 八に五仏子は四果支仏しかしぶつの第一なり
  - 九に菩薩は三乗の中の第一なり
  - 十に仏は諸法の王なり
- 六喩
- 一に海は深大なり
  - 二に山は高中の高
  - 三に月は円中の円
  - 四に日は照中の照
  - 五に梵王は自在の中の自在
  - 六に仏は極中の極

玄の一三<sup>+</sup>に云はく「薬王品に十譬を挙げて教を歎ず、今其の六を引かん。大なること海の如く、高きこと山の如く、円かなること月の如く、照らすこと日の如く、自在なること梵王の如く、極なること仏の如し。海は是坎かんの徳なり。万流歸するが故に、同一鹹なるが故に。法華も亦爾なり。仏の証得したまふ所なり。万善同じく歸し、同じく仏乗に乗ず。江河川流は此の大徳無し。余経も亦爾なり。故に法華最大なり。山王は最も高し。四宝の所成なるが故に、純もつぱら諸天のみ居するが故に。法華も亦爾なり。四味の教の頂いただきに在って、四誹謗ひぼうを離れ開示悟入かいじごにゅうす。純もつぱら一根一縁同一の道味なれば、純もつぱら是菩薩にして、声聞の弟子無きが故に。月は能く虧盈あるが故に、月は漸く円かなるが故に。法華も亦爾なり。同体の権実なるが故に、漸を会して頓に入るが故に。灯炬星月は闇と共に住す。諸経の二乗の道果を存して小と並立するに譬ふるが故に。日は能く闇を破する故に。法華は化城けじょうを破し草庵を除くが故に。又日は星月を映奪えいだつして現ぜざらしむるが故に、法華は迹を払ひ方便を除くが故に」と。籤二七に云はく「薬王を引く中に二と為す。初めには正しく引証し、次に引諸の下は四を以て教に例す。初めの文に二、先づは引き、次に釈す。初めに又二、先づは総じて数を挙げて去取し、次には列。初めの文をいはず、薬王品に、仏宿王華しゆくおうけの為に十喩を説きたまふ。今但六を引くことは、余の四を六に望むるに猶分喩を成ず。是の故に四を合して此の六の中に在り。次に月の譬を云はず、実は盈つるが如く、権は虧くるが如く、同体の権実は、月輪の欠くること無きが如く、漸を会して頓に入るは、明相漸く円かなるが如し。故に知んぬ、前の教相

の中に是漸頓と云ふは、月の譬へと意同じ。経の中に星を以て月天子に比して天子を拳  
 ぐると雖も、経に合して既に此の法華経最も為れ照明と云ふ。故に今但円を取り、亦兼  
 ねて明を以て譬へと為す。次に日の譬への中に復灯炬星月を加ふ。今日の譬へに合する  
 中に、但化城を破す故と云ふは、但日の明能く諸明を映ずるを取るが故のみ。若し更に  
 合せば亦灯等の四を以て、二乗及び通別の菩薩に譬ふべし。並びに無明と共に住するが  
 故なり。故に次に重ねて引く中には略して星月を挙げて方便を除くといへり。故に知ん  
 ぬ、方便の所收復広し」と。秀句<sup>下<sup>+</sup></sup>に云はく「又云はく、衆星の中に月天子最も為れ  
 第一なるが如く、此の法華経も亦復是くの如し。千万億種の諸の経法の中に於て、最も  
 為れ照明なり<sup>以上</sup>。天台法華玄に云はく、月は能く虧盈あるが故に、月は漸く円なるが  
 故に。法華も亦爾なり。同体の権実なるが故に、漸を会して頓に入るが故に。灯炬星月  
 は能く闇と共に住す。諸経の二乗の道果を存して小と並立するに譬ふ<sup>以上</sup>。当に知るべ  
 し、兼但对帶の随他意の経は未だ最照有らず。他宗所依の経は但照明の徳のみ有りて最  
 明の徳有ること無し。天台法華宗は最照明の徳有りて無余果の已死の人を照らせり。仏  
 種を滅せずして成仏せしむる故に<sup>第三の譬</sup>。又云はく、又日天子の能く諸<sup>いし</sup>の闇を除くが如  
 く、此の経も亦復是くの如し。能く一切不善の闇を破す<sup>以上</sup>。当に知るべし、他宗所依  
 の経は闇を破すの義未だ円満せず。故に日高山を照らして未だ幽谷を照らさず。幽谷を  
 照らすと雖も、未だ平地を照らさず。天台法華宗は已に平地を照らし、山谷俱に照らす。  
 故に能く不善の闇を破る。深く以有るなり<sup>第四の譬</sup>。又<sup>十</sup>云はく「当に知るべし、他宗  
 所依の経は未だ最も為れ第一ならず。其の能く経を持つ者も亦未だ第一ならず。天台法  
 華宗の所持の法華経は最も為れ第一なるが故に。能く法華を持つ者も亦衆生の中に第一  
 なり。已に仏説に依る。豈自歎ならんや<sup>第八の譬</sup>。籤の一<sup>五</sup>に云はく「若し尽くして  
 経を消せば、応に土等の四山を以て四味の如く、須弥は十山の内に在りて而も最も高き  
 は、仏界の十界の中に在りて而も最勝なるが如くなるべし」と。秀句<sup>下<sup>+</sup></sup>に云はく「浅  
 きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり」と。又<sup>+</sup>云はく「経を尋ねて宗を定めよ」と。  
 又<sup>四</sup>云はく「法華を訳する三蔵」と。又云はく「法に依って人に依らざれ義に依って語  
 に依らざれ」文。

疏記の四の本<sup>五</sup>の十双

- 一 双 二乗に近記を与へ、如来の蓮本を開く。
- 二 双 隨喜は第五十の人を歎じ、聞益は一生補処に至る。
- 三 双 釈迦は三逆の調達を指して本師と為し、文殊は八歳の竜女を以て所化と為す。
- 四 双 凡そ一句を聞くにも感く記を与え授く、経名を守護するに功量るべからず。
- 五 双 品を聞き受持するに永く女質を辞し、若し聞いて誦誦するは老いず死なず。
- 六 双 五種法師は現に相似を獲、四安樂行は夢に銅輪に入る。
- 七 双 若し悩乱する者は頭七分に破れ、供養すること有らん者は福十号に過ぎたり。
- 八 双 況んや已今当は一代に絶えたる所、其の教法を歎ずるに十喻をもって称揚す。

- 九双 地より涌出せるを阿逸多一人をも識らず、  
東方の蓮華は竜尊王未だ相本を知らず。
- 十双 迹化には三千の塵点を挙げ、  
本成をば五百の微塵に喩ふ。

記の四に云はく「今義に依り文に附するに略して十双有り、以て異相を弁ず。二乗に近記ごんきを与へ、如来の遠本を開く。随喜は第五十の人を歎じ、聞益は一生補処ふしよに至る。釈迦は三逆の調達を指して本師なと為し、文殊は八歳の竜女を以て所化と為す。凡そ一句を聞くにもことごと咸く授記を与ふ。経名を守護するに功量はかるべからず。品を聞いて受持するは永く女質を辞し、若し聞いて読誦するは老いず死なず。五種法師は現に相似を獲、四安楽行は夢に銅輪に入る。若し悩乱する者は頭七分に破れ、供養すること有らん者は福十号に過ぎたり。況んやいごんとう已今当は一代に絶えたる所、其の教法を歎ずるに十喩をもって称揚す。地より涌出せるをば、阿逸多一人をも識らず、東方の蓮華は竜尊王未だ相本を知らず。況んや迹化には三千の塵点を挙げ、本成をば五百の微塵みじんたどに喩へたり。本迹の事の希なる諸経に説かず」文。

秀句の中下九に云はく「能化所化俱に歴劫無く、妙法経力即身成仏りゃっこうす」竜女即身成仏文。同じく上本初に云はく「未顕已顕肩を比べ実をあらそ争ひ、三乗一乗権を訴へて是非す。現在の麁食者偽章数巻を造りて法をそし謗り人を謗る」と。

秀句上中下。  
伝教の疏なり。  
弘仁十二年此の  
十勝を造り嵯峨  
天皇に奏す。

- 一に仏説已顕眞実勝
- 二に仏説経名示義勝
- 三に無問自説果分勝
- 四に五仏道同帰一勝
- 五に仏説諸経校量勝

- 六に仏説十喩校量勝
- 七に即身六根互用勝
- 八に即身成仏化導勝
- 九に多宝分身付嘱勝
- 十に普賢菩薩勸発勝

記の六三五六に云はく「諸経多名経王等とは、重ねて教に約して釈す。諸経に法身の義を明かすこと有る者を即ち経王と名づけ、智法に契ひて相称ふを等と名づく。故に機の中に法に対し智に対するに約して王々等と名づく。即ち諸部の大乘と小と相對するに、世人了せずして諸大乘に皆経王と称するを見て、乃ち法華と諸経と等しと謂へり。今謂はく、乳及び二蘇に皆法報を談ず。俱に王と称すと雖も諸経の王には非ず。縦ひ経有りて諸経の王と云ふとも、已今当説最爲第一と云はず。兼但对帶其の義知んぬべし」と。又六十四云はく「諸部を諸王と為す。興廢と言ふは委しく興廢を論ずること具に玄文の第五卷に明かすが如し。今略論して部に対して説かんと欲せば、則ち華嚴には二は興、二は廢、乃至法華には一は興、三は廢なり。今は乃ち諸の小王を廢して唯一主を立つ。是の故に法華を王中の王と名づく。次に又此経の下は、此の経の教を会するに約す。今この経の中には部に余経無きを以て、部は即ち部中の尊極そんごくなるを王と為す。教は即ち部内の教の主なるを王と為す。既に教に大小を分かち、王も亦尊卑あり。国界に寛狭あり、民に多少有り、資産各異おのおのにして所出不同なり。故に部内の教に通別の二轍あり。別は則ち当界に恩を施す、通は乃ちすべから須く大国に歸すべし。故に知んぬ、部・教俱に須く会通

すべし。故に前には部と云ひ、後には乃ち教と云ふ。昔に在っては未だ会せず。一国の内の二・三の小王の各蒼品そうほん おさを理めて未だ大国に帰せざるが如し。故に方便の教主に王の名無きにあらず。但し兼部の中の円極の主弱し。若し会せられ已はって後は、同じく一化つるおに沾つふ。民に二主無く国に二王無し。爾れより已前は、或は歸し歸せず。歸せざれば仍なほ是ほ小王輔やせられて已むを獲えずして之を統すぶ。小王は本より長に背くこと無けれども、良まこととに民心未だ帰せざるに由る。民若し歸従すれば王は本より一統なり。此を以て法に会するに義比知すべし」と。弘の五七に云はく「大經に云ふが如く、衆流海しゅるに入つて本の名を失ひ、万流ことごと咸そく会して体増損無し」と。文句の十三に云はく「此の經の所説は実相を以て真に入る、声聞の法を決了するに是諸經の王なり。実相もて俗に入る、一切の治生産業相違背せず。実相もて中に入る、諸法仏法に非ざること無し」と。止の三七に云はく「未だ会せられざる時は尚円を知らず、何に況んや円に入らんや。仏若し宗を会して漸を開し頓を顯はせば、悉く皆通じて入る。即頓に非ずと雖も、而も是漸頓なり。故に法華に云はく汝等の所行は是菩薩の道なり。各宝車おのおのに乗りて子の本願に適ふ。声聞の法を決了するに、是諸經の王なり。漸法を開通して悉く入ることを得せしむ」文。「仏世尚四十余年を経て眞実を顯はさず」文。玄の一三に云はく「万流歸するが故に、同一鹹なるが故に、法華も亦爾なり」十喻の積なり。玄の三四に云はく「百川の海に会して其の味はひ別ならざるが如し」通教の積なり、分の開会なり。又云はく「釈論に云はく、諸水海に入つて同一鹹味なり。諸智如実智に入つて本の名を失ふ。故に衆水すべを総て俱に一鹹となる」と。籤の一六に云はく「海に徳と言ふは徳は得なり、衆水を得るが故に。万善は万流に合し、仏乗は一鹹に合す」と。止觀の三三に云はく「諸法の中に於て皆実相を見る、衆流の海に入りて本の名を失ふが如し」と。守護章下の上に云はく「実經の文を会して権の義に順ぜしむるは、梟の額を州に打ち牛迹ごしゃくに大海を入るゝが如し」と。法華論に十七名を列ぬ天親菩薩の論「一に無量義經、二に最勝修多羅、三に大方広經、四に教菩薩法、五に仏所護念、六に一切諸仏秘密法、七に一切諸仏秘藏、八に一切諸仏秘密處、九に能生一切諸仏經、十に一切諸仏道場、十一に一切諸仏所轉法輪、十二に一切諸仏堅固舍利、十三に一切諸仏大巧方便經、十四に説一乘、十五に第一義住、十六に妙法蓮華經、十七に最勝法門なり」と。籤の七四に云はく「法華論の十七名の中の意は第十六を既に妙法蓮華と名づく。当に知るべし、諸名並びに是法華の異名なるのみ」と。末法燈明記九に云はく「破戒の僧を供すれば国に三災起る。何に況んや無戒をや」と。又七云はく「末法に持戒有らば怪異なり。市に虎有るが如し。此誰か信ずべけん」と。顯戒論縁起に云はく「今より已後声聞の利益を受けず。自ら誓願して二百五十戒たちま忽ちに捨て畢んぬ」文。文句の十三に云はく「色身變現さんまいを三昧と名づけ音聲じょう弁説だらにを陀羅尼と名づく」文。